

沖縄の「門中化」に関する一考察

——佐敷町屋比久部落の事例から——

安 和 守 茂

一. はじめに

本稿は、民俗社会における門中組織の形成・発達＝「門中化」の問題を、祖先崇拜の発達という分析枠組から検討を加えることを目的としたものである。

沖縄の門中の主な機能を祖先祭祀に求める見解は門中研究史上の定説である。門中の祭祀世界にあらわれる独特の祖先観は、沖縄民俗に固有ではなく、門中集団の成立とともに出現したものである。門中組織の形成・発達＝「門中化」の問題はこれまでさまざまな角度から論じられてきたテーマであるが、筆者は門中の本質からして、門中の「門中化」の問題は、民俗社会における祖先崇拜の発達という点に収斂されると考える。中根は、沖縄の門中が、中国、韓国の宗族とちがって、墓や位牌を媒介とした社会的、作為的性格の強い集団だという指摘をしているが¹⁾この見解は門中形成の問題＝「門中化」を考えるにもかなり示唆深い。

上述の視角から、本稿の論点をかいつまんで述べてみることにする。

まず、民俗社会において祖先信仰は門中という社会制度を格好の器として発達したということであり、この意味で門中は祖先祭祀の新しい準拠枠組を提供したということ。同時に門中に付随するものとして門中元家の神棚や門中墓があるが、具体的には門中に付随するこれらの社会事物が媒介項となって、祖先信仰の発達＝祖先観の変容を強力に推進していった、ということである。

酒井が正当にも指摘するように、かつて沖縄の民俗社会において祖先信仰はきわめて微弱で、例えば死というものは嫌悪すべき、忌わしい出来事以外の何物でもなかった。ところが15、6世紀以来仏教の移入・受容等を契機として、死に意味をもたせ、後世（グソー）の世界が宗教的な価値をもって意識されてくると、死者に対するさまざまな供養や儀礼が実修され祖先崇拜が次第に高まりをみせていった²⁾。「門中化」という現象は沖縄社会におけるそうした歴史の潮流に呼応した1つの動きであろうが、門中独自の祭祀の世界観は、共時・通時的にさまざまな変差をもって存在していた祖先観や祭祀の様式を駆逐し画一化していったと考えられる。「門中化」に関する一連の研究報告は、祖先観のそうした変容が時間の経過とともに進行したことを追認させてくれるものといえる。

話は少し飛躍するが、門中制度はもともと、首里王府の政治的意図の下に支配政策の一環として17世紀以降士族層の間に形成されたものである。そして問題の農村地域における門中の形成については、士族層の間で発達をみた門中が後年農民階層にも模倣・受容され拡まっていったのではないかというのが有力な見解である。この場合問題は次のことである。すなわち本来政治的な要因によって発達した門中制度がそれから独立して農村部でも社会組織として定着した理由は何か、ということである。筆者はこの問題を、祖先崇拜のあり方の変遷という次元でとらえることができると想定する。門中が従来の「死者崇拜」に新しい準拠枠組を与えることを可能にした限りにおいて、農民階層にまで浸透していったのではないかと考

1) 中根千枝「沖縄・本土・中国・朝鮮の同族・門中の比較」日本民族学会編『沖縄の民族学的研究』、1973年、288-290頁。

2) 酒井卯作『琉球列島における死霊祭祀の構造』第一書房、1987年、435-480頁。

える。この際先述の如く、門中元家の神棚や門中墓の普及がとくに大きな役割を果たしたということが重要な点である。

本稿の問題の所在を簡潔にまとめておく。祖先信仰の高まりということは、これを社会的に表現すれば主観的な認識過程の変化ということになるだろうが、「門中化」の問題は、主観的な認識過程の変化が社会的にいか客体化されていったのかということ。より具体的には、祖先観の変容を実現するどのような諸契機によって門中の祭祀世界が構成されていったのかを説明することが本稿の中心的な課題である。

二. 調査村の概況と門中

本稿の調査地である屋比久部落は行政的には佐敷町に属する。佐敷町は沖縄本島南部島尻群に属し、県都那覇市よりバスで約40分、距離にして約16キロメートルの位置にある。人口は10,620人(1984年)を教え、面積は10.28平方キロメートルの町である。現在は13部落が佐敷町を構成している。

屋比久部落における門中のあり方について概観しておく。神戸大学社会学研究室(代表北原淳)では1987年から現在まで佐敷町屋比久、小谷両部落における村落調査を断続的に行なっており、屋比久部落の門中に関して、一定程度の分析がなされている(中間報告は、北原淳編『沖縄における村落社会構造の研究』文部省科研報告書、1989年)。以下では、これまでの調査結果から帰結された屋比久部落の門中について述べてみる。屋比久は本島南部に位置するわけであるが本島南部は門中制度が早くから発達した地域であり、屋比久部落における門中の態様は、これまで門中研究で先学によって明らかにされた典型的な門中像と重なっている。

屋比久には土着門中、および移住民がつくった移住門中合わせて合計7つの門中が存在する³⁾。

東門門中	41戸
伊利小前門中	13戸

新垣門中	12戸
呉屋門中	11戸
平田門中	9戸
新屋門中	3戸
小谷門中	0戸

屋比久部落の門中のあり方(構造・機能)に関して要点を指摘していくと、次の通りである。

第1点として、屋比久部落の門中は父系出自集団であるわけだが、門中の系譜観には特徴的なものがある、ということである。いずれの門中とも門中の出自は歴史上の高名な人物(琉球王朝時代の支配者層)に辿られ、現存の門中成員はこうした父系始祖からの子孫であると意識されている。

第2点として、門中は父系出自的な組織原理を貫徹するために父系イデオロギーによる血筋の継承が厳格に遵守されている。この原理は典型的には「他系混交の禁忌」と呼ばれる養取慣行に具現されており、養子は同一門中内の父系血縁者から選定することが規範化されている。

第3点として、門中に付随する事物は右の3つが最重要である。すなわち、門中元家の神棚、門中墓および門中ゆかりの拝所(=アジシー墓)である。門中元家の神棚、門中墓およびアジシー墓の内門中墓は比較的「近い祖霊」を祀ってあるのに対して、門中元家の神棚、アジシー墓は「神格化した遠い祖霊」を祀ってある。これら3つの要素は門中集団の成立にきわめて重要であり、本論でも詳しく取り上げる。

最後に第4点として門中の祭祀であるが、門中は祖先祭祀に機能を顕在化する集団であり、祭祀集団としてとらえられる。屋比久の門中において現在行なわれている門中行事儀礼は、清明祭、神御清明祭、5月・6月ウマチー等が大事である。清明祭、神御清明祭は墓を対象とした墓前祭祀であり、ともに旧暦3月に行なわれる(神御清明祭が通常一週間程早く行なわれる)。清明祭が門中墓(トーシー墓)を祭祀する行事であるのに対して、神御清明祭は一門ゆかりのアジシー墓を順々に巡って祭祀を行なう。また5月・6月ウマチーは門中単位のみでなく村落レベルで行なわれる村落祭

3) 戸数は部落内の戸数。小谷門中は現在子孫はすべて部落外に転出しているが、門中元家の空屋敷が門中の祭場として保存されている。

祀でもある。近年では村落の祭祀が形骸化しつつあるなかで門中単位で実行されるのが比較的残存している。

(屋比久部落における) 門中の態様は以上の通りである。本論では、こうした分析結果をふまえて序節で述べた如く門中の生成史的側面を聞き取りから得られた資料にもとづき検討を試みるつもりである。

三. 門中元家の神棚と「門中化」

田中真砂子は「Categories of Okinawan "Ancestors" and the Kinship System」(Asian Folklore Studies XXXVI-2 1977) という論稿で⁴⁾ 沖縄における祖先の民俗概念を詳しく分析し整理しているが、その中で門中元家の神棚にいる祖先の性格についても検討している。田中によるとまず沖縄の祖先は3種類に区別されるとするが「フトッキ(仏)」、「グッス(元祖)」および「カミ(神)」一、神棚にいる祖先はこのうち「カミ」であるとされる。

「フトッキ」、「グッス」および「カミ」という3種類の区分についていうと、この区分の基準は、祖霊が三十三年忌の最終年忌供養を経ているか経ていないかが重要な目安である。ポイントのみを述べると、「フトッキ」というのは三十三年忌の年忌供養をまだ済ませていない霊のことで、ヤー(家)の仏壇で祀られている祖霊である。それに対して「カミ」と呼ばれるものは、最終年忌を大きな節目として、「フトッキ」から転化し神へと昇華した祖先霊である。

田中による沖縄の祖先概念の分析の留意点は三十三年忌の年忌供養を転機とした祖先霊の神への転化ということに着眼した点にあるのだが、門中元家の神棚にいる祖先の性格に関しては、神へと昇華した祖先霊と理解されていることが肝要である。このことは田中が別の論稿で、沖縄の祖先崇拝が2種類に区分されるとしその間に転化が行なわれると述べていることから明らかである。すなわちそれによると沖縄の祖先崇拝は、近い家族的祖霊をまつ「元祖

事」⁵⁾ から死後7代目以上の祖先で門中元家の神棚にいる祖先をまつる「門中事」へと祖先崇拝儀礼が転化するとされる⁶⁾。

上述の如く門中元家の神棚のカミをめぐるのは、三十三年忌あるいは「人家七世」(7代目)等死後の一定の時間経過を境にした祖先霊の神への転化という見解はほぼ定説化しているが、比嘉政夫は最近こうした見解にたいして文献的研究をふまえて疑義を提起している。比嘉は、門中形成以前の状況をも視野に収めながら、沖縄の祖先観を分析するには、「神棚にはどのような神々がましますのか」ということの確認から始めることが重要だと述べている。このことは門中元家の神棚にいるカミを単純に祖先霊とみなすことはできないとする主張にもとづくにはかならない⁶⁾。

本節では門中元家の神棚に関して具体的データにもとづき検討を行なう。結論を先取りして言えば、筆者は、神棚にいるカミは門中形成後に門中のルーツの正当性根拠として創作されたものであると考える。

1) 門中元家の神棚と「アジシー先祖」

門中元家の神棚の形態から述べておくと、屋比久の諸門中において神棚には2つのタイプが認められる。1つは門中元家の家屋内に設置されているもので、神御棚と呼ばれる。あと1つは家屋外に独立した祠として設営されたもので、神御棚に比してより立派である(神アシャギ)。屋比久の7



[写真1] 門中(平田門中)の神アシャギ。

4) 田中真砂子「Categories of Okinawan "Ancestors" and the Kinship System」Asian Folklore Studies XXXVI-2, 1977.

5) 田中真砂子「出自と親族」渡辺欣雄編『親族の社会人類学』至文堂、1982年、104-106頁。

6) 比嘉政夫「祖先と祖先神」窪徳忠先生沖縄調査二十年記念論文集刊行委員会編『沖縄の宗教と民俗』第一書房、1988年、394-399頁。



【写真2】 平田門中の神アシャギの内部。神棚に香炉が置かれている。

門中の内東門門中、呉屋門中の2門中が神御棚を有しており、残りの門中は家屋外に神アシャギを有している。聞き取りから神アシャギは神御棚より時間的に後期の作である。家屋内にあった神棚(神御棚)を、霊的職能者であるユタの教示等に従い、家屋外に独立した建物をつくって納めたのが神アシャギである。

さて、神棚に祀られているカミはどのような性格のカミなのかだが、このことについてみていく。

有体に言うと、門中元家の神棚に祀られているカミは「アジシー」と呼ばれるカミである。「アジシー」は漢字を当てれば「按司子」である。「按司子」とはほかならぬ琉球王国の官人層(しかも上級官人層)に与えられた尊称である。実際情報提供者は、「アジシー」は琉球王朝支配者層の血筋を引く者であると説明している。

村びとが門中元家の神棚にいるカミ(=「アジシー」)を門中の祖先—「神格化した遠い祖先」—であると認識していることは次の事実からうかがわれることではある。すなわち村びとは神棚に祀られている「アジシー」をしばしば「アジシー・ファーフジ」、あるいは「アジシー・グونس」(ファーフジ、グونسは祖先の意)と呼んでい

る。けれども村びとは他方で上述の如く、「アジシー」は琉球王国時代に属する人びとであり、ムラの創設、統治に携わった者として認識している。「アジシー」に関する村びとのこうした認識をみる限り、「アジシー」が少なくとも「フトッキ」から神へと転化した祖先霊であるとみなすことは容認しがたい。門中元家の神棚に祀られている「アジシー」はむしろ、「フトッキ」、「カミ」等とは違った今一つの祖先概念であるとみた方が当を得ている。

門中元家の神棚をみてみたい(写真2参照)。神棚に置かれているものとしては香炉が大事であり、香炉はカミを表象している。香炉は「アジシー」の霊代であり、香炉1個で特定の「アジシー」が表象されている。屋比久のいずれの門中とも神棚には香炉の数は複数個あるが、それは各門中で祖先神として崇めている「アジシー」の数に照応している。神棚に置かれている香炉を門中ごとに列記すると下の如くである。

東門門中	4個
伊利小前門中	3個
新垣門中	5個
呉屋門中	4個
平田門中	3個
新屋門中	3個
小谷門中	10個

門中元家の神棚には、香炉のほかに「アジシー」の位牌が置かれている例もある。この位牌は香炉とは違って1つで、香炉が置かれている棚とは別に向かって左横に設置された棚に祀ってある。位牌にはその主である「アジシー」の名前が書かれている。この点香炉の他に位牌が置いてあることは「アジシー・ファーフジ(祖先)」の存在がより具現化されることで留意すべきである。

神棚に香炉と並んで「アジシー」の位牌を祀ってある門中は屋比久7門中の内東門門中、新垣門中および新屋門中の3門中である。情報提供者によれば、神棚に「アジシー」の位牌を祀ってある門中は移住民がつくった比較的新しい門中ではなく「12代」以上を教えるような最古の門中とのことだが、東門、新垣および新屋門中とも屋比久部

落では最も古く、加えて最も有力な門中であることで共通している。

東門門中、新垣門中および新屋門中について神棚の位牌にはそれぞれの門中の「アジシー・ファーフジ（祖先）」の名が記されている。

東門門中

「帰真 知念掟親雲上 霊位」

新垣門中

「渡慶敷主 嫡子渡慶敷親雲上 霊位」

新屋門中

「帰元 知念按司 霊位」

「知念按司」の「按司（アジ）」は繰り返すように琉球王国時代の上級官人職のことである。また「知念掟親雲上」、「渡慶敷親雲上」の「掟親雲上（ウッチパークミー）」、「親雲上（パークミー）」とも、「按司」よりは位階はおちるが、同じく琉球王国の役人制度における役職名である⁷⁾。神棚の位牌に関しては村びとも位牌の主である「アジシー・ファーフジ」が琉球王朝支配者層の血筋を引く人物だと考えていることをここで再度述べておく。

2) 事例の検討—東門門中の事例—

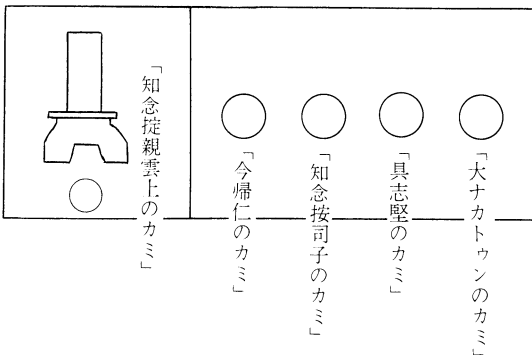
門中元家の神棚に祀られているカミに関し事例を取り上げてさらに詳しく検討してみたい。取り上げる門中は東門門中である。東門門中は屋比久部落で最も古くかつ現在でも最も有力な門中である。

門中元家の神棚で拝むカミには、東門門中に限らず、3種類（3次元）のカミがあることが聞き取りから判明している。それらは右の通りである。第1は「沖縄本島の一般的ルーツ（今帰仁、久高島等）のカミ」である。第2は「そのムラの一般的なカミ」である。第3が「その門中の始祖のカミ」である。第2の「そのムラの一般的なカミ」というのは、部落ゆかりの聖地・拝所を依代としているカミである。こうしたカミはムラの草分け的な始祖のカミとして認識されている。

図1は東門門中の門中元家の神棚の様子を示してある。東門門中の神棚には先述の如く香炉の他に「アジシー」（「知念掟親雲上のカミ」）の位牌も祀られているが、この「アジシー」の位牌は左側部分の棚に置かれている。神棚全体でスペースはかなり大きくとられていて（全体の1/3強）、位牌の前には対としての香炉が置かれている。次にそれ以外の「アジシー」の香炉だが、東門門中の神棚には「アジシー」の香炉は4個置かれている。これら4個の香炉は次のような祖先のカミを表象している。左から順に、「今帰仁のカミ」、「知念按司子のカミ」、「具志堅のカミ」および「大ナカトゥンのカミ」である。

東門門中に即して下に「門中化」の観点から、門中元家の神棚のカミの性格について検討してみる。東門門中の場合、「今帰仁のカミ」が「沖縄本島の一般的ルーツのカミ」にあたるカミで、「知念按司子のカミ」、「具志堅のカミ」および「知念掟親雲上のカミ」が東門門中の「門中の始祖のカミ」である。また「大ナカトゥンのカミ」は「ムラの一般的なカミ」にあたるカミである。「大ナカトゥンのカミ」からみていくことにする。

図1 東門門中の門中元家の神棚



①「大ナカトゥンのカミ」—「ムラの一般的なカミ」
「大ナカトゥン」というのは、ムラの豊饒の祭礼（ウマチー）に行なわれるトゥン祭祀のトゥンの1つである。屋比久ではウマチーのときに拝まれるトゥンは「大ナカトゥン」を含めて全部で5つある（「大ナカトゥン」、「渡嘉敷トゥン」、「ヌル・ドゥンチ」、「地頭トゥン」および「グシクトゥン」。これらトゥンは屋根付きの建物や自然石を並べた石造物である）。

7) 真栄田・三隅・源編『沖縄文化史辞典』東京堂出版、1972年、430頁。



〔写真3〕 ムラの始祖ゆかりの聖地・拝所であるトウンの1つ、大ナカトウン。右下の自然石を置いた石造物。

トウンはムラの始祖ゆかりの聖地・拝所であり、それぞれのトウンに始祖のカミが宿っている。「大ナカトウンのカミ」はこうしたトウンの1つである「大ナカトウン」を依代とするカミである。

屋比久の上記5つのトウンについては1713年編集の『琉球国由来記』に出ており、当時の屋比久において旧暦2、5、6月の各ウマチーにこれらのトウンが拝まれていたことが記載されている。

さて東門門中の神棚に祀られている「大ナカトウンのカミ」に関しては右のことが問題である。「大ナカトウンのカミ」は「ムラの一般的なカミ」にあたるカミだが、この種のカミは本来はムラの農耕儀礼であるウマチーにムラ全体で拝まれていたカミであること。このカミがなぜ東門門中の神棚に祀られるようになったのかということである。『琉球国由来記』の18世紀初頭には農村地域において門中はまだ形成されておらず、トウン祭祀は門中とは無縁であったと考えられる。

情報提供者によればトウンを依代とするムラのカミは部落を創設した「アジシー」でありトウンはこの「アジシー」が住んでいた屋敷を表現しているともいわれる。しかしこうしたカミは少なくとも特定門中と結びついた始祖ではなかったはずである。

「ムラの一般的なカミ」というのは世代深度の深いカミである。東門門中の神棚には門中始祖として「大ナカトウンのカミ」が祀られているが、1つだけ指摘されることは、この種の世代深度の深いカミは、門中独自の祖先拡大的な系譜観と密接な関連をもつことである。

②「今帰仁のカミ」—「沖縄本島の一般的ルーツのカミ」

東門門中の門中元家の神棚には「今帰仁のカミ」が祀られているが、「今帰仁のカミ」は今帰仁にいるカミのことである。今帰仁は東とならんで沖縄の祖霊信仰として、その濃密さを代表すると思われる聖地巡拝の土地として有名である。「今帰仁詣り」、「東詣り」というのがそれである。

東門門中では20年程前までは、3年ごと、5年ごとに門中でバスを借り切って今帰仁の地へこぞって巡拝を行なったとのこと。東門門中に限らず「今帰仁詣り」、「東詣り」はかつて沖縄本島の各門中集団にとって不可欠の行事であったという。

今帰仁という土地は本島北部に位置しており、今帰仁は中、南部農村からみてはるかに遠隔地である。このような遠隔の土地に父祖の地として祖先崇拝の場所を設定したのは、それ以前の祖先崇拝のあり方とは一線を画する。

東門門中の元家の神棚に「今帰仁のカミ」が祀られていることは新しい祖先崇拝のあり方に対応したものであることは明らかである。

③「知念按司子のカミ」、「具志堅のカミ」および「知念掟親雲上のカミ」—「門中の始祖のカミ」

東門門中の神棚には東門門中の「門中の始祖のカミ」として、「知念按司子のカミ」、「具志堅のカミ」および「知念掟親雲上のカミ」の3者のカミが祀られている。これらのカミの性格について同様に「門中化」の観点から検討してみる。

東門門中の神棚にいる「門中の始祖のカミ」をめぐることは、過去にカミの移葬や遺棄があったということが指摘される。現在東門門中の元家の神棚にいる門中始祖のカミはそうした過去の移葬や遺棄の結果存在しているカミである。下ではこのことについて説明していく。具体的事例としてみてみたいのは、「知念掟親雲上のカミ」と、あと1つ「知念按司子の

長男のカミ」である。後者の「知念按司子の長男のカミ」は、かつて東門門中の門中元家の神棚に祀られていたが後に神棚から取り下げられ遺棄されてしまったカミである。

「知念掟親雲上のカミ」からみておきたい。「知念掟親雲上のカミ」は後年他所から東門門中に移葬してきたカミである。しかもそれは東門門中の門中集団成立後かなり後の時代になってからである。

墓の問題は次節以下で論じる予定だが、東門門中が門中墓を構築したのは今から約160年前である。東門門中が門中墓を構築したのは屋比久では最も早い方であるが、門中墓の出現と門中集団の形成との不可分な関係からして、東門では少なくともこの時期には門中集団の成立をみていたことは間違いない。「知念掟親雲上のカミ」に戻ると、「知念掟親雲上のカミ」を東門門中の門中元家の神棚に移葬してきたのは今から約90年前である。「知念掟親雲上のカミ」は琉球王朝支配者層の血筋を引く祖先とされるが、このカミが東門門中の神棚にて祀られるようになったのは比較的新しいというのがポイントである。

「知念掟親雲上のカミ」を東門門中の門中元家の神棚に移葬してきた経緯を簡潔に述べておく。知念村安座間（知念村は佐敷町に隣接する村）に「前道小」という屋号の家があり、「知念掟親雲上のカミ」の位牌は当初そこで祀られていた。ところが後になって、「知念掟親雲上のカミ」の位牌は東門門中が「もちまえ（祭祀すべき一筆者注）」だということが判明した。それは東門門中の「オーレッチ」（先の戦火で焼失、由来記のことか）から調べてみた結果である。このとき霊的職能者であるユタの教示も判断の大きな根拠になったという。そこで東門門中では「前道小」から「知念掟親雲上のカミ」の位牌を移動してきて門中元家の神棚に祀るようにした。それが約90年前のことである。以後東門門中では「知念掟親雲上のカミ」を門中の始祖のカミとして神棚にて祀っている。

東門門中の門中元家の神棚にいるカミに関してあと1つ、「知念按司子の長男のカミ」をとり上げておく。「知念按司子の長男のカミ」は「知念掟親雲上のカミ」とは対照的に、過去に神棚から取り下げられて遺棄されたカミである。

東門門中の神棚には現在4個の香炉と1個の位牌が置かれて合計5体のカミが祀られているが、戦前にはこの5体のカミのほかにもう1体のカミが祀ら

れてその香炉が置かれていた。それが「知念按司子の長男のカミ」である。「知念按司子の長男のカミ」というのは「知念按司子のカミ」の長男である。東門門中の門中元家の神棚には戦前には現在の「知念按司子のカミ」とともにその嫡子である「長男のカミ」との、親子2代のカミが祀られていたわけである。

「知念按司子の長男のカミ」を門中元家の神棚から取り下げたのは右の事情からである。先の「オーレッチ」を調べたところ、「知念按司子の長男のカミ」として祀って置かれているはずの香炉は「知念按司子」の長男ではないことがわかった。それは長男ではなく実は「知念按司子の次男のカミ」だということが判明したのである。東門門中は「知念按司子」の嫡男系の血筋を引く子孫であり、傍系である次男のカミを拝む必要はないことになった。そこで東門門中では当初の「知念按司子の長男のカミ」の香炉を神棚から取り下げるに至った。

以上、東門門中の事例に即しつつ門中元家の神棚にいるカミについてみてみた。

門中元家の神棚に祀られているカミの問題を簡単にまとめておく。門中元家の神棚には3種類のカミ—「沖縄本島の一般的ルーツのカミ」、「ムラの一般的なカミ」および「門中の始祖のカミ」—が祀られているが、これらのカミについては右のことが断言される。すなわちこれらのカミはいずれとも、村びとの認識がどうであれ、門中集団の系譜上にある祖先とのつながりは考えられない、ということである。門中元家の神棚にいるカミに関して問題とされることはむしろ、世代深度のきわめて深い伝説上のカミが門中の祖先神として祀り上げられるに至ったそのいきさつである。そこに我われは、民俗社会における祖先観の変容をうかがうことができるし、そうした認識変化が、門中元家の神棚という創造物を通して社会的に客体化されていった（＝門中の祭祀世界の確立）プロセスを看取することができるのである。

四、「アジシー先祖」とアジシー墓

アジシー墓の検討に入るに先立ち、沖縄における墓制の変遷を簡潔にみておく。墓制の発達は祖先崇拝のあり方と関係が深く、墓制の発達と祖先崇拝の

成熟とは相互規定的な関係にあることはいうまでもない。

酒井の見解にしたがえば⁸⁾、沖縄の墓制の発達には3つの段階が認められる。最も初期の段階が「洞窟墓」で、第2に「石積墓」、そして第3の段階が現在の門中墓である。こうした墓制の発達には各発達段階に照応した祖先観がみられ、墓制の発達は民俗社会における祖先信仰の高まりに規定されている。

現在の門中墓は門中制度の成立とともに出現した墓型式だが、それ以前は墓制は「洞窟墓」もしくは「石積墓」である。「洞窟墓」、「石積墓」は原始的な段階の墓型式で、門中墓のように祭祀を前提とした墓の概念ではない。「洞窟墓」、「石積墓」のうち「石積墓」は「洞窟墓」よりはより発達した墓制で、門中墓出現前の墓型式である。「石積墓」は「洞窟墓」のように人骨を洞窟や原野に放置するのではなく、文字どおり石を積んで簡易につくった墓でもそこに遺骨を整理収納しようという考えに支えられている。本節でとり扱うアジシー墓は、墓制の第2段階である「石積墓」と密接な関連をもっている。

アジシー墓は、門中元家の神棚にいるカミ（「ア



【写真4】 ナチジン墓。東門門中のアジシー墓の1つ。木の根元を掘り込んで墓にしてある。



【写真5】 門中のアジシー墓に選択している（平田門中）。アジシー墓巡礼を門中行事としてはとりやめているが、個々の門中成員が遠方の地にあるアジシー墓に向かって選択している。

ジシー) が依代とする墓のことである。村びとは実際には神棚にある香炉を通してアジシー墓に祈願を行なっているわけで、アジシー墓の問題は門中元家の神棚の問題と不可分に関連している。以下ではアジシー墓が「門中化」の過程で門中のルーツを表現するものとして創作されたとの認識に立ちつつ、アジシー墓の問題を検討する。

屋比久部落における門中のアジシー墓に関し特徴的なことを順を追って指摘していく。アジシー墓の性格をとらえるには、とりえず右の諸点—〈アジシー墓の数〉、〈形態〉、〈アジシー墓巡礼（神御清明祭）の起源〉、〈内容〉、および〈門中のアジシー墓とムラの「無縁墓」との関係〉等、が問題となる。村びとはアジシー墓を「大昔の墓所」だと述べているが、アジシー墓に関し上記内容を説明することから、「大昔の墓所」が門中のアジシー墓として特別に意味付与されたプロセスを看取することが肝要である。

まず第1にアジシー墓の数だが、各門中でアジシー墓として認識され拝まれる（神棚の祭祀とは別に〈アジシー墓巡礼〉として拝まれる、後述参照）アジシー墓の数はかなり恣意的である。アジシー墓は門中元家の神棚にいるカミが宿る拝所だが、門中で拝まれるアジシー墓の数は通常その門中元家の神棚にいるカミの数（香炉と位牌の数であらわされる）以上存在する。この点、アジシー墓は門中元家の神棚と必ずしも厳格に照応され

8) 酒井卯作『前掲書』、481—500頁。

て拜まれてはいない。

またアジシー墓の所在だが、門中のアジシー墓はムラ内部やムラ周辺部のみにあるのではなく、首里や今帰仁といった遠方の地域にも散らばっている。首里や今帰仁はいうまでもなく琉球王府とゆかりの深い地である。

第2にアジシー墓の形態だが、アジシー墓の形態は一言で言えば、その殆んどはきわめて粗末な墓所である。また1人の先祖を葬った墓とみられるものもあれば、個人でなく複数の先祖が葬られている墓と思われるものもある。

アジシー墓の形態は具体的には次の通りである。大きな自然石を彫り込んで墓にしたもので、彫り込んだ内部に遺骨が散在していたり遺骨壺が置かれている(「自然墓」)。大木の根元の地面を掘り抜いて遺骨を納めてあるもの。当初から穴が空いている岩を利用した墓(「チヂフギ墓」)。地上に墓所の指標として2、3個の自然石を並べてある墓。あるいは後世に手を加えたのであろうが、自然石を並べるかわりに「内間ウ謝氏の墓」、「宮平家之墓」等というように簡素な墓碑を建てている墓所である。

アジシー墓について留意されるべきことは先述の如く、こうしたアジシー墓はいずれとも屋比久部落成立当初の「大昔」から存在していたと村びとの間で認識されている。アジシー墓が門中形成以前の原始的な段階の墓(「石積墓」)であることの根拠は何よりもその形態や古さに求められると、いってよい。

第3にアジシー墓巡礼だが、門中ゆかりのアジシー墓を順々に巡って祭祀を行なうアジシー墓巡礼は旧暦3月の神御清明祭に行なう門中行事儀礼である。このアジシー墓巡礼=神御清明祭は『琉球国由来記』の年中祭祀の項のどこにも載っていない、門中形成後の新しい行事である。大昔の墓所が遠い祖先の安住の場所として祭祀の対象とされたのは「門中化」以後であることが指摘される。

第4に神御清明祭のアジシー墓巡礼の内容だが、巡礼の対象であるアジシー墓には歴史上名高い墳墓が含まれている。有体に言えばその墳墓とは「玉陵」であり、屋比久部落の神御清明祭を行なう門中はいずれとも「玉陵」をアジシー墓祭祀

の1つに教え上げている。「玉陵」とはいうまでもなく琉球王尚家正統の墳墓として1501年に建立された墓である。

最後に第5にアジシー墓とムラの「無縁墓」との関係だが、特定門中からは門中のアジシー墓として認識されている墓所がムラからは「無縁墓」とみなされて祭祀されている墓が少なからずある。

ここでムラの「無縁墓」について言及すると、屋比久部落においてムラ全体で祀られるムラゆかりの古い墓がある(合計11ヶ所)。これらはムラ全体の彼岸祭や清明祭に「無縁墓」として一括して拜まれている。「無縁墓」は古い無縁仏を祀ったとされる拝所だが、門中のアジシー墓と比べてみると、その形態にしろまつわる伝説にしろ、祀る当事者が門中ではなくムラという点が違うだけで、門中のアジシー墓と全く同じ性格である。

そこである墓所が門中からは門中のアジシー墓とみなされムラからは「無縁墓」とみなされて拜まれていることだが、門中のアジシー墓とムラの「無縁墓」は本来同一のものではないかと想定される。このことは「大昔の墓所」が特定門中のアジシー墓として認識されるか、そうではなくムラ全体で「無縁墓」として祀られるかはかなり恣意的であることを意味する。この際門中のアジシー墓にしろムラの「無縁墓」にしろそれらは後世における〈発見物〉であるということが上述の仮定となれるものである。

アジシー墓の性格をめぐるはとりあえず以上のことが重要である。くり返すようにアジシー墓の如く「大昔の墓所」がある時期から門中の遠い先祖の墓とされて拜まれるようになったのは、民俗社会における祖先信仰の高まりを背景としている。この点はムラの「無縁墓」も同様であるが、アジシー墓の本質に関わるこうした問題は後段で再度考察するつもりである。

次に屋比久部落の門中のアジシー墓を具体的にみてみたい。

屋比久部落の6つの門中の内(小谷門中を除いた)現在神御清明祭のアジシー墓巡礼を比較的順守して行なっているのは呉屋門中、新屋門中および東門門中の3門中である。下にこれら3門中の

アジシー墓を記しておく。

呉屋門中—4ヶ所

- 玉城村百名および同村垣花にある各「アジシー墓」(2ヶ所ともアジシー墓の名称等不明)
- 「宮平家之墓」(西原町桃原)
- 「玉陵」(首里)

新屋門中—5ヶ所

- 「アジシー墓」(アジシー墓の名称不明、知念村久手堅)
- 「知名子の墓」(知念村知名)
- 「ヌル墓」(西原村幸地)

この墓に眠る先祖は尚円王の母方と関係あるとのこと。

- 「知念若按司の墓」(佐敷町小谷)
- 「知念按司」の嫡男子の墓。
- 「玉陵」

東門門中—7ヶ所

- 「アジシー墓」(アジシー墓の名称不明、那覇市小録)
- 「ウミカナシ墓」(知念村)

琉球国王尚円王の副妻が葬られている墓。東門門中はこの副妻が産んだ男子をとおして尚円王に血筋が通れるとのこと。

- 「知念若按司の墓」(佐敷町小谷)

東門門中は新屋門中と同様にこの墓をアジシー墓として拝んでいる。知念若按司は知念按司の嫡男子だが、新屋門中が知念若按司の長男筋の子孫、東門門中が同次男筋の子孫とされる。

- 「内間ウ謝氏の墓」(知念村知名)

知念若按司同様に内間ウ謝氏も琉球王朝支配者層の血筋を引くとされる。内間ウ謝氏は琉球王族と東門門中との媒介的な位置にいる先祖である。「内間ウ謝氏の墓」は東門門中だけでなく、知名部落ではムラの拝所として祭祀している。先の「無縁墓」にあたる墓でもある。

- 「ミントマヤーの墓」(知念村久手堅)

この墓にはどのような先祖が葬られているのかわからず、伝承は途絶えている。

「ナチジン墓」(屋比久部落)

「ナチジン墓」は「ナチジンシー(今帰仁子)」の一族の墓といわれる。ナチジンシーは屋比久部落の統治のために今帰仁から派遣されてきた按司とされている。東門門中が「ナチジン墓」をアジシー墓として拝するのは、ナチジンシーの一族の娘である「今帰仁マカト」(ナチジンシーから数えて5代目の子孫)が東門門中に嫁に来ていたからとのこと。「ナチジン墓」は上の「内間ウ謝氏の墓」同様に、屋比久部落では「無縁墓」として拝まれる墓である。

「玉陵」

門中のアジシー墓に関してあらためて「門中化」の観点から若干の考察を行なってみる。

門中のアジシー墓は次のようにとらえることができる。アジシー墓は村びとの言明するように「大昔の墓所」であり、「門中化」以前一門中墓出現前—の墓の形跡である。「門中化」以前には民俗社会にあって祖先崇拜の観念は微弱であったから、死者は簡素な形態の墓—酒井のいう「石積墓」—に納められて死者の記憶は人びとの脳裏から速やかに忘れ去られたに違いない。また墓所それ自体についても、それらの墓所は特定の子孫によって定期的に祭祀供養が行なわれたわけではないから、墓所が特定の親族と結びついて認識されたとはいえない。墓所の存在をめぐる伝承がせいぜいなされたにすぎないと思われる。

後年、門中イデオロギーが農村社会に伝播し「祖先探し」の気運が高まると、「大昔の墓所」の存在はにわかに注目されて特別の意味を付与されるに至ったに違いない。つまり新しく成立した門中にとって、門中出自のルーツを限りなく深化させ歴史上の貴種に結びつける好個の根拠になりえたと思われる。そうした門中認識の確立は部落で最古の有力門中(屋比久では新屋、新垣、東門門中等)でいち早く行なわれたであろうし、出自を貴種に結びつけることは部落内での自門中の勢力を強化する有効な方法であったとも思われる。

ここで門中のアジシー墓とムラの「無縁墓」との関係性を述べておくと、アジシー墓と「無縁墓」はともに「門中化」以前の原始的な段階の墓とい

うことで両者は同一であったとみられる。「無縁墓」という言葉はそれ自体、祖先信仰が発達した段階での後世の概念である。「無縁墓」という考え方の裏には、死者（祖先）は子孫から永久的に祭祀を行なわれなければならないという観念が存在する。「大昔の墓所」を門中のアジシー墓として拝むようになったのも、あるいはムラ全体で「無縁墓」として祀るようになったことも、その動機づけは大きく違うとしても、根源は祖先崇拜の発達であるといえる。

門中の祭祀世界はアジシー墓の創作を重要な1つの契機に確立されていったということは上述のことにもとづいている。

五. 門中墓と「アジシー先祖」

田中は沖繩の祖先類型を分析した前掲論稿の中で、家の仏壇や門中元家の神棚だけでなく、門中墓にも論及している。それによれば門中墓の内部はいくつかの空間に分けられ、各空間には異なるタイプの祖先の遺骨（壺）が安置されている。

田中によると門中墓内に安置されている祖先の遺骨（壺）は次の3つのタイプに分けられる。第1は最近年の死者の遺骨壺で、これらは墓入口に最も近い空間に安置されている。第2は一門の祖先一般の遺骨で、遺骨の個性はとうに失われた祖先の遺骨。この種の祖先の遺骨は最奥部の共同納骨所に混在して納められている。上の第1の祖先の遺骨はいずれは例外なく壺から出されてここに納められる。そして第3は門中にとってとくに重要な祖先の遺骨壺で、門中の創設的始祖やそれ以外に重要な祖先の遺骨壺である。このタイプの祖先の遺骨壺は墓入口より奥部の空間部分に置かれており、固定して安置され共同納骨所には納められない。

本節では、屋比久部落の門中の門中墓の問題をめぐり1つのことを検討する。それは門中墓内に安置されている特定の先祖—「アジシー先祖」—の遺骨壺の問題である。この「アジシー先祖」の遺骨壺は上述の3つのタイプのどれにも該当しない祖先の遺骨壺である。この祖先の遺骨壺の存在は本稿の「門中化」の問題を考えるにきわめて示唆深い。

以下に、屋比久部落の門中の門中墓内に安置さ



〔写真6〕 東門門中の門中墓。約160年前に構築された。

れている「アジシー先祖」の遺骨壺について具体的事例を呈示する。

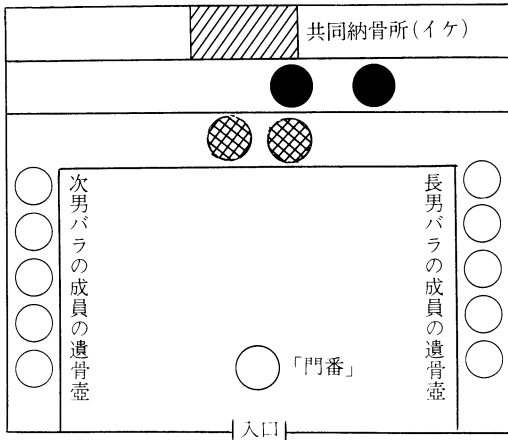
あらかじめ断っておくと屋比久の6つの門中の内（小谷門中を除いた）門中墓内に「アジシー先祖」の遺骨壺が確認されているのは、東門門中と伊利小前門中の2つの門中のみである。この点門中元家の神棚やアジシー墓とは多少事情を異にするが、事例の希少さは問題の本質の重要性を減じるものではない。参考までに他の門中における「アジシー先祖」の遺骨壺の存否をめぐる事情を言及しておく。例えば呉屋門中のように、屋比久土着の門中ではなく移住門中であるため「アジシー先祖」の遺骨壺は当地の門中墓にはなく、母村の西原町にある上位門中の門中墓内に安置されている例。あるいは新垣門中のように、「アジシー先祖」の遺骨壺はないが墓廊内の深奥部の土壁（共同納骨所の上方部分）に「ニービ」と称して四角形の窪みがあり、そこに「アジシー先祖」が葬られているという例、等々。

東門門中および伊利小前門中の門中墓内にある「アジシー先祖」の遺骨壺をみていく。いずれの門中とも「アジシー先祖」の遺骨壺は墓廊内の納骨棚の最上段に固定して置かれている。遺骨壺の形態はとくに「ティラジーシ」と呼ばれる如く通常成員の遺骨壺とは違って立派なものである。

1) 東門門中の事例

図2は東門門中の門中墓の内部の様子を示している。図2をみてみれば、門中墓内部の納骨棚で遺骨壺がある秩序にもとづいて配列されていることがうかがわれる。門中墓内の遺骨壺の安置のあり方には一定の祖先関係が投影されていることが

図2 東門門中の門中墓の内部



- 注1) ●はアジシー先祖の遺骨壺を示す。また●は東門門中の門中墓を構築した先祖で、田中のいう第3のタイプの先祖(「門中の創設的始祖やそれ以外に重要な祖先」)の遺骨壺にあたる。
- 2) 東門門中は長男バラ、次男バラの分節システムから成っており、門中墓内にて通常成員の遺骨壺は、遺骨安置の規則として、バラごとに安置・配列するようにしてある。
- 3) 「門番」というのは一門最新の故人の遺骨壺のこと。後続の故人の壺が出てこの後続者の壺が「門番」になると、先客故人の遺骨壺は中段(左右いずれか)の納骨棚に配列される。

予想されるが⁹⁾、この点に関しては本論からそれるので図2に記した以上のことは言及しない。

東門門中の場合、門中墓内に「アジシー先祖」の遺骨壺は2個安置されている。図2では●であらわしたのがそれで、納骨棚の最上段—共同納骨所の手前に置かれている。これら2個の遺骨壺の中の「アジシー先祖」は、「知念掟親雲上」および「今婦仁マカト(母子)」である。両者の関係は「知念掟親雲上」が「今婦仁マカト(母子)」よりも上位世代の祖先とのことである(このため「知念掟親雲上」の遺骨壺は最上段の納骨棚で長男バラの側に寄せて安置している)。また前節をふり返ってみればわかるように、「知念掟親雲上」は東門門中の門中元家の神棚にその位牌が祀ってあった「アジシー先祖」である。

「アジシー先祖」の遺骨壺が門中元家の神棚やアジシー墓同様に「門中化」の過程で創作されたものとの観点からこれをとらえてみると、次の事

実が重要である。すなわち「知念掟親雲上」、「今婦仁マカト(母子)」の両「アジシー先祖」の遺骨壺は、後年になって、他の墓所から東門門中の門中墓に移葬してきたものだ、ということである。その時期はそれほど古くなく、東門門中が門中墓を構築してから比較的後のことである。下ではこのことを中心に説明していく。

まず「知念掟親雲上」の遺骨壺からみる。

「知念掟親雲上」の位牌の方は東門の門中元家の神棚に祀られており「知念掟親雲上」に関する説明は前節でその位牌の移動の経緯をみたときに行なったのでここではくり返さない。「知念掟親雲上」の遺骨壺の移葬は位牌の移動より少し後れてなされた。「知念掟親雲上」の位牌は知念村の「前道小」なる屋敷の家から移動してきたのだが、遺骨は同じく知念村の「ウフジチュー墓」から移葬してきた。「ウフジチュー墓」について想起すべきは「ウフジチュー墓」とは東門門中が神御清明祭に祭祀する、東門門中のアジシー墓の1つにほかならない。東門門中ではその祭祀対象であるアジシー墓から「先祖」の遺骨を掘り出し、その掘り出してきた「アジシー先祖」の遺骨を東門門中の門中墓内に安置した。それが「知念掟親雲上」の遺骨壺だというわけである。この点はすぐ後に述べる「今婦仁マカト(母子)」の遺骨壺についても全く同様であり、東門門中の墓廓内に存在する「アジシー先祖」の遺骨壺の問題は上述の内容につきる。

さらに「知念掟親雲上」の遺骨壺をめぐるのは次のことも付言しておく必要がある。「アジシー先祖」の遺骨壺の創作性を考える上で興味深いことである。「知念掟親雲上」の遺骨壺は実を言うと、遺骨は中に入ってなく空っぽの遺骨壺である。知念村安座間の「ウフジチュー墓」には他の父系親族の遺骨も多数混在しており「知念掟親雲上」の遺骨のみを識別して取り出すことは不可能だったとのこと。それでやむをえず東門門中の門中墓内に空っぽの遺骨壺を安置したということである。

次に「今婦仁マカト(母子)」の遺骨壺についてみる。

9) 桜井徳太郎「沖縄本島の冥界婚姻巫俗」法政大学沖縄文化研究所編『沖縄文化研究』5、1978年、45頁を参照。桜井は、門中墓内では死者(祖先)たちが現世と同様に秩序ある冥界生活を営んでいると指摘している。

先述の如く「今婦仁マカト（母子）」の遺骨壺は「知念掟親雲上」の遺骨壺と同様に後年他の墓所から東門門中の門中墓に移葬されてきた。その墓所というのは「ナチジン墓」である。「ナチジン墓」は東門門中のアジシー墓の1つで、屋比久部落にある。「今婦仁マカト（母子）」の遺骨壺を移葬してきたのは約60年前の1931年で、「知念掟親雲上」の遺骨壺の移葬におくれること30余年後である。

「今婦仁マカト（母子）」の遺骨壺だが、この遺骨壺にはマカト（母）とその長男子の遺骨が納められている。「今婦仁マカト」は前出の「今婦仁子」（屋比久部落の統治者として派遣されてきた按司）の子孫とされるが（「今婦仁子」から下って5代目）、東門門中にとって「アジシー先祖」としてはマカトよりも幼くして死去したその長男子の方が重要である。この点については後にも触れる。

「今婦仁マカト（母子）」の遺骨壺を東門門中の門中墓に移葬してきたいきさつを、「今婦仁マカト」に関する伝承もおりませながら簡単にみでみる。

「今婦仁マカト」は「今婦仁子」の子孫だが、「今婦仁マカト」が東門門中のメンバーシップを得たのは東門門中の元家に婚入してきたことによる。東門門中の元家を創設したとされるのはかの「知念若按司」の次男筋の男で、「今婦仁マカト」はこの元家の創設者である次男筋の男と結婚した。ほどなくして「今婦仁マカト」はある事情により離婚するに至った。そのとき男の子供が1人おり、この子供を連れて生家に戻った。マカトが婚家先の姓ではなく生家の姓でもって「今婦仁マカト」と称されている所以である。死後その遺骨は母子ともども1つの遺骨壺に納められて生家の墓である「ナチジン墓」に葬られたとされる。

ところが約60年前の1931年に、東門門中では門中会議のうえ、「ナチジン墓」を掘り返すに至った。そしてそこからマカト母子の遺骨壺を取り出し、東門門中の門中墓に移しかえた。「今婦仁マカト（母子）」の遺骨壺の移葬の理由は右の如くである。マカトだけなら移葬することはないがその長男子がともに葬られていること、このためにマカト母子の遺骨壺は東門門中の門中墓に帰属すべき

である。当の長男子は幼くして死去したとはいえ東門門中の血筋を引く者であり、東門門中の遠い高貴な先祖につながっていく者だからである。

「ナチジン墓」内には他にも少なからぬ遺骨や遺骨壺があったが、「今婦仁マカト（母子）」の遺骨壺を識別するのは難しくなかったという。「ナチジン墓」内にある遺骨壺はその表面の「銘書」の部分に被葬者の名前等が記されており、また「伝承どうり」マカトのものと思われる金のカンザシも見つかったからである。

とりあえず以上が、東門門中の門中墓内に存在する「アジシー先祖」の遺骨壺の問題の説明である。「アジシー先祖」の遺骨壺に関してはくり返すように、門中墓内にある「アジシー先祖」の遺骨壺は門中のアジシー墓から掘り出されてきたということが重要なポイントである。そのことは、「ウフジチュー墓」であれ「ナチジン墓」であれ「大昔の墓所」が門中のアジシー墓として認識付与された過程と密接に関連していることはいうまでもない。

2) 伊利小前門中の事例

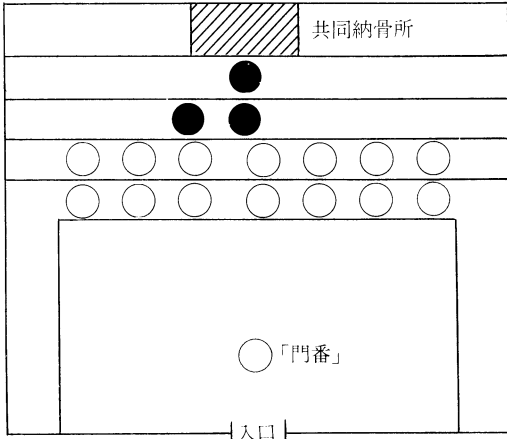
続いて伊利小前門中の事例をみでみる。伊利小前門中の事例も問題の所在は東門門中と同様であり東門門中の事例と重ね合わせるかたちで説明しておく。

伊利小前門中の門中墓内には「アジシー先祖」の遺骨壺は3個存在する。図3に示したように、墓廊内にて「アジシー先祖」の遺骨壺は最上段の納骨棚に（3段目に2個と4段目に1個）安置されている。

伊利小前門中では東門門中の場合とは違い、「アジシー先祖」の遺骨壺がどのような事情で墓廊内に安置されたのか過去の情報は途絶えてしまっていた。が、それらの遺骨壺に納められている当の「アジシー先祖」の人物は判明している。それは数年前に門中墓を新築した機会に墓廊内の遺骨壺を調べたことによる。そのときには旧門中墓の墓廊内から遺骨壺をすべて取り出して、遺骨壺の表面部の「銘書」を某大学の専門家に依頼して鑑定してもらったとのこと。

3個ある「アジシー先祖」の遺骨壺の内2個は判読できたが、1個は判読不能だった。判読不能

図3 伊利小前門中の門中墓の内部



注1) 伊利小前門中は東門門中のように分節化しておらず、単一バラからなる門中である。
門中墓内にて、通常成員の遺骨壺は「門番」務めをしたあと順に中段の納骨棚に配列される。

な1個は最上段の4段目に安置されている遺骨壺である。情報提供者によればこの「アジシー先祖」の遺骨壺は自然石を削り込んで壺にしたもので、蓋を開けてみると中には「遺骨は溶けてなくなり、サムライの着物のような金ピカようなものがあった」という。判読不能だったのは遺骨壺の「銘書」の文字が小さかったことにもよるからである。

あとの2個の「アジシー先祖」は、その中に納められている「アジシー先祖」の人物を知ることができた。それぞれの遺骨壺の「銘書」には次のように記されていた。

大清康熙二十三年甲子七月十六日

「道翁紹徳禪定門」前中

屋比久親雲上

前中屋比久親雲上女子

真加戸樽安座間親雲上□

通心如源信女洗骨比厨子

納之千時死去

康熙五十一年壬辰十一月六日

「銘書」の日付からみて17世紀後半から18世紀初頭に生きたしかもおそらく高貴な先祖である。しかしこの時期には民俗社会のレベルでは門中墓

および門中集団のいずれとも未だ形成されていなかったことはあらためて述べるまでもない。「門中化」以前の状態には人びとの系譜認識のあり方はきわめて浅く、上位世代の先祖を超世代的に認識していく発想はそもそもないといえる。この種の「アジシー先祖」の遺骨壺が東門門中同様に門中形成後に創作された後世の産物であることは疑いないことである。

六. おわりに

本稿は、沖縄社会における門中の「門中化」の問題を祖先崇拝の発達という分析視角から検討を試みたものである。門中組織の形成・発達は祖先観の変容を動因に強力に推し進められ、究極的には琉球王国を祖先祭祀体系の頂点とする門中の祭祀世界が構築されていったということが本稿のテーマである。

沖縄の門中の問題に関し、若干の付言をして本稿をしめ括りたい。

門中の「門中化」現象を問題にするととき門中の発生史的側面まで考察の視野に入れることは必要であろうが、本論ではこの点には何も触れていない。「門中化」の動きは一定の社会的文化的条件を背景に起こるわけで、門中の始原的問題はそのことを解明する1つの鍵である。この点歴史史料にもとづいた検証が大切であろうが、昨今沖縄周辺離島部で報告される「門中化」の動きの芽ばえが重要なヒントになるかと思われる。今後の課題である。

上述のこともそうだが沖縄の門中、「門中化」の問題は祖先崇拝の枠組からのみでなく多面的なアプローチから分析されるべきことはいうまでもない。下では1点だけ、社会経済的な秩序変化との関連から述べておく。

1つの社会の祖先祭祀組織は当該社会の土台である経済的構造に規定づけられることはいうまでもない。沖縄において地域共同体＝血縁社会の解体、もしくは結合力が弛緩したことは経済的变化と連動したことだが、「門中化」現象がそうした社会文化構造の変動と密接な関連をもつことは疑いえない。門中組織の構造的拡大は、村落の流動性や稼働性—社会関係の広範な広がり軌を一にし

た社会的現象である。

最後に、沖縄の門中は沖縄社会の歴史的特殊状況の中で形成・発達してきた社会事象である。近年那覇等都市部では「門中化」に対抗する動きとして「脱門中化」がいわれている。今後沖縄の門中像がどのように変わっていくのか、あるいは変わっていかないのかは、門中の本質を明らかにする上で示唆深いテーマである。そのことは同時に沖縄社会の変容の性格を探る上でも好個の手がかりになるはずである。